

橋本努著「学問の技法」ちくま新書、筑摩書房 2013年1月10日刊を読む

学問の技法—あしたのために—

1. (1) あしたのために(その1)＝思想をポケットに＝

人生の突破口を開くため、あるいは優秀そうなクラスメイトに克つため、まず、気になる作家や思想家の本を、ポケットに忍ばせる事。この際、本を手から離さぬ心構えで、毎日なんども小刻みに開くべし。

私淑すべき作家・思想家を発見すれば、突破口は三倍広がるものなり。

(2) あしたのために(その2)＝対質する＝

念仏を唱えるがごとく、好きな作家や思想家と向き合う事。入門書は読まんでいい。分からんでもいい。まずは当たって砕けよ。本に赤線を刻みこみ、ねばり強く問いつづけよ。物分りの悪さは、自分の思想を展開するために必要な能力である。牛のごとくゆっくりと、打たれ強く前に進むべし。

これ、三か月で自己変容する必殺の修行なり。

(3) あしたのために(その3)＝^{いつかく}一角の人間になる＝

各種専門試験のための勉強など、かけら程もいらん。専門試験勉強に意義を見出しているかぎり、浅薄な人生観にしか到達せん。必要なのは哲学とマイナー芸術。つまり、とことん八方破れに闘い抜く不器用な者のみが、深い人生を手にするのだ。

(4) あしたのために(その4)＝姿勢が生命だ＝

背筋を鍛える事。椅子に長時間座っているための筋力を鍛えれば、脳はブレイクし、それが人生の決め手にもつながる。

(5) あしたのために(その5)…

2. (1) あしたのために、あなたは何をしているだろうか。大学生活は、充実しているだろうか。私の場合、大学生活は悩みばかりの多い時期であった。大学というのはどうも、就職のために必要な勉強を教えてくれるところではなさそうである。就職のために必要な勉強など、ないようである。したがってつまり、大学の講義に出席する意味も、あまりなさそうである。そんな「意味喪失」の感覚に陥っていた私は、パッとしない成績に甘んじる一方で、「自分探し」の海外放浪に、なんどもトライしていたのだった。

- (2) ところがしだいに、大学で教えられる学問の一部が、魅力的にみえてきた。倫理学や社会学などは、よく分からないけれども、なんだか面白そう。そんな学問を一通り理解するためには、しかし、ベートーベンの曲をピアノで弾けるようになるくらいの努力が必要ではないか。そう考えてみると、途方にくれたしまったのだった。いったい、大学では、どんなやり方で学習していけばいいのだろうか、と。

(3) その当時、自分で学問を始めるための方法を教えてくれる人は、いなかった。私は試行錯誤を続けるほかなかった。挫折することも多かったが、キッカケとなる出会いもあった。本書は、そうした私の実体験から生まれている。挫折を繰り返すなかで得た実践知を、学び方の指南としてまとめている。

しかしそもそも、なぜ学問なんかするのだろうか。「そんなこと、意味がないかもしれないじゃないか」と思われるかもしれない。

(4) 次のように答えたい。学問は、あなたの「志」や「野心」をはぐくんでいるだろう。およそ大学生が抱く「志」や「野心」の多くは、小さなものばかりでつまらない。ところが学問の快樂を味わえば、「志」や「野心」は、もっと大きなものになって、あとから付いてくる。だからまず、学問の快樂を「味わう」ことが先決である。学問を通じて、人は、大きな志や野心を抱くようになる。人生の先が見えず、迷っているあなたにこそ、学問を手にしてほしいのである。

(5) 「志」や「野心」はさしあたって要らない。必要なのは「別の何か」である。これまで、まじめに勉強してきたけれども、人生の「意味」だとか、社会への「関心」を見出せないという人もいるかもしれない。大学では、まじめな高校生のように勉強しても、あまり評価されないという現実がある。およそ<よい子>たちは、大学に入ってから見えない壁にぶち当たる。これまでの勤勉実直さが通用しなくなる。そんな壁を打ち破って成長するためには、いったい、何をすればよいのだろうか。

(6) まず必要なのは、「あしたのために」1、2、3……である。自分を鍛えるための方法である。次に必要なことは、本書に書かれている。本書のなかで、私は丹下段平(あしたのジョーの拳闘トレーナー)の役割を引き受けたいと思う。この本を読んで、パンチ力のある人間が生まれることを、心底願っている。

3. (1) 本書は、大学で学ぶためのコツについて論じている。これから大学生活を迎える人、大学生活半ばで、そろそろ学問しないとマズイのではないかとと思っている人、大学の授業には失望したけれども、ちょっとやる気になって学問してみようと思った人、大学生活をいかに過ごすかと迷っている人、働きながら夜間の大学に通っている人、そしてもちろん、学校を卒業された人。本書はそのような人々に捧げられている。

(2) 私は定職を得るまえに、一時期、ある大学の夜間コースで非常勤講師をしていた。夜間コースの学生たちは、昼間の学生に比べてやる気があると言われる。私の講義の受講生たちも、そのとおりだった。けれども学生たちは、読書の仕方や勉強の仕方などの、基本的な事柄で悩んでいるという。そこで私は、四頁ほどの簡単なマニュアルを作って配布してみた。これが意外と好評だったので、それ以来、いろいろなアドバイスを書き溜めていった。本書は、そうしたアドバイスから成っている。

(3) 大学で求められているのは、「学問」であって、「勉強」ではないと言われる。では「学問」と「勉強」の違いとは、なんだろう。「大学で学問する」という言い回しは、すこし古臭い感じがする。大学の先生たちも「専門研究」という言葉を用いて、「学問」という言葉を避ける傾向にあるようだ。それでも多くの学生にとって必要なのは、「専門研究」の方法よりも、この社会で生き抜くための、「学び方のコツ」ではないだろうか。個々の専門研究を越境して、広く豊かなコミュニケーションを築いていくための、諸学の知恵で

はないだろうか。

(4) 福澤諭吉は『学問のすすめ』(1872～76年)のなかで、知識を応用することの大切さを説いた。これに対して私は本書のなかで、「学問」という言葉に、新たな息を吹き込んでみたいと思う。学問とは、読んで字のごとく、「学んで問うこと」である。たんなる「勉強＝教え込み」でも「専門研究」でもないような、自由に伸び伸びとした「学び」の道があるはずである。

(5) 実際問題として、「学び」の道は、大学を卒業してからも、いや大学を卒業してからこそ、本格的に必要な。どんな分野でも、一流の人たちは、つねに貧欲に学んでいる。学問と仕事は、深いところで結びついている。たんに小手先の仕事術を身につけるのではなく、学び方の根本に立ち返って、仕事全体を見直しながら自身を発展させていく。それができる人こそ、一流の仕事人ではないだろうか。学問は、人生をさまざまな方向に展開するためのポテンシャルを与えてくれる。大学で不本意な学び方をしてしまったら、なおさら原点に立ち戻らなければならない。本書を通じて、読者がそれぞれ、自分なりの人生を踏み出すことができれば幸いである。

P9～15

[コメント]

大学生のための「学問の技法」ではあるが、小・中学生にとっても、社会で活動したり充実した人生を目指す人々にとっても有難い一冊。自己学習能力の育成の上でも非常に参考になる。是非、御一読の上、御自分なりの工夫を加えて、一生にわたっての実行を。

－ 2013年2月8日 林 明夫記－